

★印は、皆さんへの特におススメの本です

子どもの性への対応を学習する

- ★「おうち性教育はじめます ～ 一番やさしい！防犯・SEX・命の伝え方～」(マンガ入り)
フクチマミ・村瀬幸浩 著、KADOKAWA
- ★「子どもを守る言葉『同意』って何？～YES、NOは自分が決める！」レイチェル・ブライアン作
中井はるの訳、集英社

幼児・小学生といっしょに学習するおススメの本

- ★「だいじ だいじ どーこだ？ はじめての『からだ』と『性』のえほん」 えんみさきこ さく
大泉書店
- ★「あっ！そうなんだ！わたしのからだー幼児に語る性と生」中野久恵 他/著 エイデル研究所
- ★「あっ！そうなんだ！性と生ー幼児・小学生そしておとなへ」浅井春夫/他 著 エイデル研究所
…この2冊は、子どもと読むときに、どのようにこの絵本を活用するか解説が後半のページに書いてあります。
- ★「いいタッチわるいタッチ」安藤由紀 著/復刊ドットコム
…巻末に「わるいタッチ」性的虐待をふせぐために」という解説が書かれています。
- ★「性の絵本」たきれい(高橋幸子 監修) KADOKAWA
<https://seinoehon.jimdofree.com/> で、内容をすべて閲覧できます。0巻～7巻 + 不登校編・番外編(虐待)まであり、幼児～思春期、親に至るまで全部網羅されています

子ども(中高生)に薦める

- ・「マンガでわかるオトコの子の「性」～思春期男子へ13のレッスン」染矢明日香/合同出版
- ・「15歳までの女の子に伝えたい自分の心と体の守り方」やまががてるえ 著 かんき出版
- ★「恋愛で一番大切な“性”のはなし」村瀬幸浩 著 十月舎
- ★「デートDV予防学」伊田広行 著 かもがわ出版

ジェンダーについて考える

- ・「女の子だから、男の子だからをなくす本」ユン・ウンジュ 著、エトセトラブックス(小学生向け)
- ★「これからの男の子たちへ～『男らしさ』から自由になるためのレッスン～」太田啓子/大月書店
男のくせに、男らしくない…そんな言葉、使っていませんか？日本と韓国では男性は、交通事故で死ぬ人より、自殺する人の方が多いのです。それは「男らしく＝強くあれ」と無意識に押し付けられ、育てられるせいかもしれません。乱暴な行いも「男の子だから仕方無い」「男らしい」と許容していませんか？性犯罪の加害者はジェンダーバイアス(性別による偏見)が強いことが分かっています。無意識に男らしさを息子やパートナーに求めて、追い詰めているのでしょうか。男の子の母となったり、保育士や教師となって男の子育てに関わることもあるかもしれない…女性にも是非読んで欲しい本です。

子宮頸がんワクチンについて考える

- ★「10万個の子宮 ～あの激しいけいれんは子宮頸がんワクチンの副反応なのか～」
村中璃子/著、平凡社
ワクチン接種が進んでいる国では、子宮頸がんはもう過去の病気になりつつあります。接種がほとんどされない日本では、産婦人科の医師たちが「私たちは、いったいいつまで、子宮を掘り続けなければならないのか…(子宮を全

部手術で取ってしまうことを「掘る」というそうです)、あと何個子宮を掘り続けるのか…」と嘆いている、というのがこの本の題名の由来です。

★「予防接種は『効く』のか?～ワクチン嫌いを考える～」岩田健太郎/著、光文社新書

コロナ禍でも注目されている、感染症専門医の岩田先生のワクチンの本です。過去のワクチンの関するデマがどんなふうになされたかのカラクリを教えてください。「ワクチンは怖くない」という著書もあり。

★「ゼロリスク社会の罠～『怖い』が判断を狂わせる～」佐藤健太郎/著、光文社新書

世の中に100%安心・安全＝リスク「ゼロ」というものは存在しませんが、日本人はどうやら、それが存在すると無意識に思っているところがあるようです。リスクをどう考えるか。ワクチンも含め、リスクに対する考え方について解説します。

※日本産科婦人科学会は、HPV ワクチンの接種を勧めています！

日本産科婦人科学会 HP → 一般の皆様へ → 公開情報
最新の知識と正しい理解のために「子宮頸がん HPV ワクチン」
http://www.jsog.or.jp/modules/jsogpolicy/index.php?content_id=4

人間関係に悩む 子どもへ、大人へ

★「ギリギリな自分を助ける方法」 井上 祐紀 著、KADOKAWA

・「友だち幻想 人と人のくつながり」菅野 仁/著、ちくまプリマー新書

フィクションだけど、考えさせられる、ためになる小説

★「彼女が好きなものはホモであって僕ではない」 浅原ナオト 著、KADOKAWA

作者はゲイの方です。ゲイの苦悩が「こういうことだったのか…」と、とてもよくわかります。NHKで「腐女子、うっかりゲイに告る」という題名でドラマ化されました。

★「海の底」・「空の中」 有川 ひろ 著、角川文庫

SFモノですが、難しい部分(私もかなり苦手)は読み飛ばしても、人間ドラマとして十分楽しめます。潜水艦という閉鎖空間の中での思春期の男の子たち(小学生もいます)と、たったひとりの女の子(高3)、の心の成長の物語です。その成長をうながす大人・・・といってもまだ23歳の自衛官の青年二人ですが、この二人がとてもステキなのです。こういう青年に成長してほしいなあ・・・と思わせます。一部エピソードを紹介します。

高3の女の子が、逃げ込んだ潜水艦の中で予定より早く月経が始まってしまい、寝ているベッドのシーツやマットを汚してしまいます。それをあわててそっと洗濯する女の子、それを見つけた二人は・・・?潜水艦の隊員は男性だけで、女性用の生活備品はなく・・・。中3の男の子たちの心の成長もすばらしく、そして、その子たちの母親たちのなかでひとり、おとなになってもおとなになりきれない、自己中心的で幼稚な心をもった母親が出てきます。

別の作品「空の中」でも、娘を一番守ってやらなければならなかったときに逃げた、心の弱い母親がでてきます。そして、人生を悟った大人が「お母さんはあなたを許すことはできない。だって、お母さんが間違っているのだから。間違っている方が許せるわけない。お母さんは自分が間違ったことに気づいていて、怖くて、あなたをみられないのだ。だから、あなたがお母さんを許してやりなさい。あなたのほうが強いのだから」と諭すのです。

こういう子どもの心を成長させられる「おとな」でありたい。そんなふうを考えさせられる作品たちです。有川さんの作品には、いつもカッコイイ「おとな」が出てきて惚れ惚れする。自分がそんな「おとな」であるか、自分を振り返る良い機会にもなるでしょう。